

# 地域と結びついた映像制作で養う批判的理解力

学校名

岡崎市立大門小学校

所在地

〒444-2135  
愛知県岡崎市大門4丁目4-1ホームページ  
アドレス<http://www.oklab.ed.jp/weblog/daimon/>

## 1. 研究の背景

本校は、学区の全てが市街地であり、岡崎市の中でも特に幅広い生活層の家庭が混在している学区である。転出入が多く、日本の各地から様々な考えや生活様式を持った人々が集まって地域社会が形成されている。しかし一方では、学区の特産品である「注連縄」づくりに代表されるように、長い歴史を持つという側面も持っている。まさに「伝統」と「変化」が共存する学区である。



しめ縄づくりを継承する活動

これまで本校では、地域社会と連携して、一人一人の子どもに目を向けた教育を推進したいと考え、「共感・共生」をテーマにした学校づくりを進めてきた。特に子どもたちと、彼らを取り巻く地域社会とのかかわりを重要視し、地域社会・身近な自然事象の中に子どもたちの学びの場を求めてきた。

例えばそれは、毎年初夏に行われている「茶摘み」行事に表れている。本校内の植え込みは茶の木であり、それを学区の方々の指導を受けながら、子供たちが摘む。その茶は「大門茶」として、地域住民に供されたり、東日本大震災の被災地へ贈られたりしている。このように、地域と子供たちのつながりを意識した教育が、本校では行われてきた。

このような行事は、子どもたちにとっては、「様々な人々と共生する」経験となる。それは必然的に、子供たちが様々な人々の考え方に触れ、それらに対して自分なりの意見を持つ経験をしていくことになり得る。そして最終的には、子どもたちが「情報」に対して「批判的な理解」をすることにつながっていくのではないだろうか。そこで実践テーマを「地域と結びついた映像制作で養う批判的理解力」とした。

## 2. 研究の目的

本研究を通し、学区に根差した映像制作を通して、子供たちの身近な社会的・科学的事象に対する理解や問題解決の力を伸ばすとともに、その過程で必要となるメディアリテラシーを高めることを目論んだ。そして最終的には、子どもたちの批判的理解力を向上させることを目指した。メディアリテラシーの内容を、本研究では具体的には以下の3つと定義した。

- ①言語力…自分の伝えたいことは何なのかを明確にし、伝える相手に合わせて言語化・可視化する能力
- ②情報理解力…地域に住む様々な人とふれあいながら、相手の考えていることを感じ取ったり、読み取ったりする能力。また、身近な科学的事象を様々な視点から追究し、得られた情報に対して自分なりの解釈を行う能力。
- ③メディア活用能力…有効な言葉や手段を活用して、自分たちの思いを確実に相手に伝えていく能力

### 3. 研究の方法

メディアリテラシーの向上を目指すために、以下の3点に重点を置き、映像制作の活動を進めた。

- ①映像というメディアを使用して、自己の内面だけでなく、客体としての社会現象、自然事象などについて、自らの力で意見を表現させる活動の場を設けた。
  - ア. コンテ作成の場面において、自分の言いたいこと、伝えたいこと、さらには目の前で起こっている自然現象を、映像を使ってどのように表現するかを考える。
  - イ. 取材や撮影の場面において、相手の思いを読み取りながらインタビューをしたり、どのようにすれば「伝わる」映像を撮ることができるのかを考えながら活動する。
- ②他者が制作した映像作品や、自分たちの作品に対して出された意見を批判的に解釈したり、受容したりする経験ができる場を設定する。具体的には、以下の場面を想定している。
  - ア. コンテ作成後に検討会を開き、互いに意見を出し合う。その後、自分たちの作品に対して出された意見について検討し、コンテに修正を加える。
  - イ. 編集完了時に作品検討会を開き、作品について相互批評を行う。ここで得られた意見について検討し、作品に修正を加えて完成させる。
  - ウ. 作品完成後には学区の方々を招き、映像交流会として作品の発表を行う。ここで得られた意見についても全員で検討をし、次年度の活動における改善点としてまとめる。
- ③子どもたち自身が、ビデオカメラを使用して撮影をしたり、コンピューターを利用したノンリニア編集を行ったりする活動を年間を通して行うことにより、メディアを活用する力を育てる。また夏休み期間には、外部より講師を招き、ビデオ講習会を開催する。これにより、撮影や編集のスキルアップを図る。
- ④これら活動の指導を行うことにより、教師自身が映像教材制作に対する関心や理解、技術を高め、次年度以降の自主的な教材制作活動への基礎を作り上げる。

### 4. 研究の内容・経過

- (1) 対象学年 小学校1～6年生（主に高学年を中心とする）
- (2) 参加者数 大門小学校児童764名 教員37名 学区の方々
- (3) 教科領域 生活科及び総合的な学習の時間 ※合科的な扱いの一部教科を含む
- (4) 活動の内容

#### ①1学期

活動開始に先立ってまず行ったのは、環境の整備である。本校の空き教室を「映像制作室」とし、電源の確保や編集用PCの設置などを行った。作業は第1回目の「映像制作に関する校内研修」として位置づけ、教員全員で行った。本校の教員には、PCそのものの操作はできても、設置や設定などは未経験の者が多かったが、本作業はそのような教員にできるだけ行わせることで、教員自身のリテラシーの向上を目論んだ。参加した教員からは「(設定など) これまでしたことがなかったが、やってみると意外に簡単だった。これなら自分でもなんとかなるのではないか」という声が聞かれた。

5月には、子供たちに対するオリエンテーションとともに、映像制作に対する興味付けを行った。岡崎市では全市的に子供たちによる映像制作の活動が行われておることから、他校の子供が制作した映像作品を視聴させることにより、映像制作に対する意欲・関心を高めることをねらいとした。それと同時に、映像制作で避けては通れない「著作権」「肖像権」など、情報モラルに関する学習も行った。このオリエンテーションにおいて、まずこれら情報モラルに関することの基礎的な知識を身に付けておき、その上で制作過程をとらえ、適切な指導を行うことで、子供たちが実践的な情報モラルを身に付けていくことをねらいとした。さ

らに保護者に対しては、学級通信や学級懇談会等で、映像制作活動についての周知を行うと同時に、子供たち自身の肖像権について許諾をいただくようにした。

この月には、教員向けにも、第2回目となる映像制作の校内研修を行った。学習情報主任を講師とし、「なぜ映像を編集するのか」ということについて、その目的や方法を全員参加の研修で学んだ。研修の開催がソフトウェアや機器を整備する前であり、実際の機器操作を取り入れた研修とすることはできなかったが、参加者からは「(映像を)編集することで、自分の伝えたいことをストレートに伝えることができるようになるということが分かった」「ビデオ(作品)作りは、授業づくりに通じるところがある」という声が聞かれるなど、教員の意欲・関心確実に高まっていることが感じられた。



映像制作に関する校内研修

6月には、5年生の理科の授業において、市内にある自然科学研究機構基礎生物学研究所より田中実準教授を講師に招き、メダカの発生についての講座を開催した。メダカの卵を実際に手で触るなど、子供たちは普段あまりできない経験をさせていただいたが、それにより子供たちの意識はメダカの卵の「表面」に向いた。「表面がどうなっているのか見たい」という子供たちの気持ちの高まりをとらえ、顕微鏡と書画カメラを組み合わせた、ごく簡単なマクロ撮影の方法を紹介した。教員・子供たちともにこの撮影法を気に入ったらしく、講座後の5年生教室では、教室で育てているメダカの卵を、教室内の50インチ大型ディスプレイに映して観察する姿が見られた。

この経験を生かし、7月には、高学年の各学級において、学校ビオトープである「ビオだいもん」を紹介するビデオ作品の制作を行った。制作開始時には、学区の方でビオトープ設立時にも協力をいただいた方を講師として招き、ビオトープの仕組みやそこに集まる生物についてのお話を聞いた。

## ②夏休み期間中

夏休み期間中には、希望者を対象に、岡崎市現職研修委員会学習情報部より講師を招き、「子どもビデオ教室」を開催した。数人の子どもたちに対して一人の割合で講師がつき、2～3分間の短い映像作品を制作した。そこで子どもたちはコンテを作成する際のコツや、様々な撮影の方法、編集のノウハウなどを学ぶことができた。なお、講師は市内の教員(8名)であったが、諸事情により休日開催となり、講師料が発生したことつけ加えておく。

## ③2学期

9月上旬からは、「『大門学区の宝』を紹介しよう」というテーマで、子供たちが地域を取材する活動に取り組んだ。この活動は、学区にある「世界に伝えたい『宝』」を取材する中で、子供たちは対象である「もの」「ひと」を中心に、「何を、どんな視点で捉え、どのように伝えるか」を考える経験をさせることがねらいであった。実際には、子供たちの考えの広がりに対応し、対象を「もの」「ひと」だけでなく、地域の人々とのコミュニケーション、社会のマナー、環境、防犯など、子どもたち自身が自分たちの学区について「すばらしい」と思うことにまで広げた。中でも、大門学区の伝統産業である「しめ縄」をテーマとして取り上げる子どもたちが多かった。

取材に出る前には各学級において、撮影に必要な知識や技術を学習する時間を確保した。指導事項は以下のとおりである。

- ・撮影には極力三脚を使用し、安定した映像を撮ることに心がける。
- ・撮影中はできるだけ三脚に手を触れないようにする。
- ・各カットの前後には、3秒ほどの「編集しろ」を必ず入れておく。
- ・インタビューの撮影時には、必ずマイクを使用する。同時にイヤフォンで音声をモニターし、確実に音声が取れているかを確認しながら撮影する。

- ・インタビューを撮影するときの画角は、インタビューされる者が向いている方が広がるようにする。
- ・光（太陽）の向きを考え、逆光にならないように気を付ける。必要であればレフ板を使う。

実際の撮影では、教員が手分けして各班に同行し、実地指導を行った。インタビューのマナーなど、実際に経験しなければ身につかないことも多いのだが、実は教員自身もこれらの経験がある者はほとんどいない。

教員にとっても、子供たちにとっても手探りの取材活動ではあったが、子供たちにとっては実戦を経験したことが大きな自信につながったようであった。教員も、はじめのうちは有効なアドバイスがなかなかできず、歯がゆい思いをしていたようであったが、経験を積むにつれ、少しずつ「逆光大丈夫?」「アングル、顔の向き考えて」など、具体的なアドバイスができるようになってきた。半分「無理やり」ともいえる活動ではあったが、教員も子供たちと同じように着実に力をつけてきたことが分かった。



子供たちによる映像編集

10月から11月にかけては、撮影を継続するとともに、編集の活動にも取り組んだ。編集には助成金で購入したビデオ編集ソフト「EdiusNeo」を使用した。本ソフトは高機能ではあるが、比較的購入しやすい価格であること、また岡崎市内の小中学校にも広く配備されていることから、本研究でも利用する価値があると判断した。

編集は班ごとに分かれ、6台のパソコンで行わせた。編集において子供たちが最も時間を割いたのは、PCの操作ではなく、編集方針であった。班の中では、たとえテーマは同じであっても、子供たち一人一人がもっている思いは微妙に違う。その違いは、編集における「どんな映像を」「どうやって」使うのかという部分で表面化した。しかし、子供たちはそこで自然発生的に、意見のすり合わせを行い、合意を形成するようになった。集団で行う映像制作の過程では、このような意見対立が起こりがちだが、それを子供たち自身に乗り越えさせることで、子供どうしが積極的にコミュニケーションを行い、合意形成を行い、集団として新たな方向性をもつことができるようになることが明らかとなった。

編集完了後には、子供どうしで、作品の相互批評をする活動を行った。子供たちが互いに「制作者」の視点で作品を見合い、率直な意見交換を行うことにより、批判的に作品を見る経験、つまり「批判的な情報理解力」を育てることをねらいとしたのである。他の班からももらったコメントを子供に渡すと、子供たちはそれらを分類し始めた。分類の観点はさまざまであったが、興味深かったのは、「採用する、採用しない」という観点である。コメントの内容と自分たちの編集方針を照らし合わせ、編集方針にそぐわないものをどうするかを考えていたのだ。手に入れた情報を全て受け取る（＝鵜呑みにする）のではなく、自分たち自身の判断基準によってそれらを分析・評価し、取り扱い方を決める。まさに「批判的な」理解を行っていた。これは、子供たち自身映像を制作者たらしめることにより、作品への思いや愛着を強烈にもたせたことにより実現されたと考える。映像制作が「批判的な情報理解」へと結びついた。

このように、情報を理解し、活用する活動を行っていく反面、子供たちの生活実態などからは、情報社会に対してあまりに無防備である一面も浮かび上がってきた。いわゆる「情報モラル」の問題である。本校の子供の携帯電話やスマートフォン所持率は市内でも高く、高学年ではそれに起因する問題行動も発生している。映像制作そのものからは少し離れるが、情報を主体的に取り扱う者として、正しい知識や態度を考えさせることが重要であることから、12月には岡崎市学習情報指導員の内田氏を講師に招き、情報モラル講座を開催した。授業後には教員向けにも同講師による情報モラル講習会を行った。



交流会での子供による発表

※申請書で予定していた「映像制作のプロに教えてもらう」講座は、講師の日程調整ができず、未実施となった。

#### ④ 3 学期

1 月には、完成した学区に関する作品を保護者の方々に観ていただき、作品を通じた交流を行った。作品に対しては「普段身近すぎて見落とししていた、学区の『良さ』を再発見できた」など、多くの励ましの言葉をいただいた。そこで得られた意見を元に作品の再編集を行い、最終完成版とした。

### 5. 研究の成果

(1) 子ども自身に映像制作をさせることにより、表現力を向上させることができた

今回の実践では、子ども自身が映像作品の制作者となり、自分の思いを映像化すべく、コンテ作成や撮影・編集を行った。例えば、「大門のしめ縄」をテーマにした作品では、「しめ縄は単なる飾り物ではなく、大門の人々の心を世代を超えてつないでいる」ことを、子どもたちはアニメーションなど様々な手法により表現することを試みた。このことから、映像制作により、自分の言いたいことを映像化・視覚化する表現力を伸ばすことができたと言える。

(2) 映像制作活動を通して、子供たちの対人コミュニケーション能力を向上させることができた

チームで作品制作をする以上、内容についての共通理解や意思統一が必要とされることから、子どもたちは活動の様々な場面において、仲間と常にコミュニケーションを取り合っていた。また取材対象に対しても、インタビューを数多く行った。これらのことから、子どもたちが映像制作をすることにより、必然的に対人コミュニケーションを行い、様々な経験をすることによってその能力を高めていくことができたと考える。

(3) 作品の批評活動を行ったことにより、情報に対する批判的な理解力が高まった。

子どもたちは、批評活動において、単なる批判ではなく、相手への共感を込めた指摘をすることができた。子どもたちは、みんなで映像制作をすることにより、対等な立場で、相手の立場を考えながら、お互いの作品を批判的に理解し、伝え合う経験をすることができた。また学区をテーマとし、映像発表会を開いて学区の方々から直接批評をいただいたことも、子どもたちにとって作品を批判的に見直す良い材料となった。このように、作品の批評活動を行ったことにより、子どもたちは批判的に作品を理解する力を高めていくことができた。

(4) 教員にとっても、映像教材制作の良さに気付くよい機会となった

本研究において子供たちに指導した内容は、多くの教員たちにとって「未知の領域」であった。しかし、そこに携わり、時には自分自身がカメラやマウスを持ち、子供たちとともに作業を行ったことで、映像制作と授業づくりの共通点に気付いた者が多くいた。つまりそれは、映像作品を客観的に分析するように、自身の授業づくりも客観視することができるようになったことを意味し、ひいては授業力の向上につながるものである。この点については、研究開始時には考慮に入れてはいなかったものの、本研究が及ぼした大きな影響の一つであると言える。

### 6. 今後の課題・展望

本研究では、映像制作について多くの内容を子供たちに指導した。それは事前に研究統括から出される資料に依っていたが、今後も研究を継続していくには、それらをきちんと集約し、記録として残していくことが必要である。その際には、学年の発達段階に合わせた、系統立てられた「指導計画」の作成が必須であると考えられる。本来であれば研究開始時にそのような計画を立てておくべきであったが、今年度はそれがなされず、半ば見切り発車をしてしまった。来年度に向けての大きな課題と言える。

本研究は、全校体制で行えたことにより、多くの教員に対し良い影響を与えることができた。ただ、全校体制で行うことができたのは、校長をはじめとする管理職の理解とイニシアチブによるところが大きい。今後、どのようにして全校体制を持続し、成果を残し続けることができるのかを考えていく必要がある。

## 7. おわりに

私のクラスのある子供が、最近こんなことを言った。「先生、昨日の〇〇（ある放送局のドキュメンタリー番組名）の△△の場面の絵（映像）、あれってどうやって撮ったんだろう？」子供たちの気持ちは、映像制作に大きくのめり込んでいる。平成23年の「教育の情報化ビジョン」において、情報活用能力育成の重要性が唱えられてからしばらく経つが、本校では、その力が、ゆっくりではあるが着実に育っていることを感じる。この火を消さぬよう、今後の研究にも積極的に取り組んでいきたい。

## < 参考文献 >

- ・松野良一（2012）「小学生による映像制作と能力開発の関係性－若狭高浜子ども放送局の事例を中心に－」『総合政策研究 第20号』（中央大学）
- ・川崎市「映像のまち・かわさき」推進フォーラム（2010）『平成22年度映像教育報告書』